

# 子どものうそと発達

神戸大学 木下孝司



みんな、うそつき

一日1・77回。この数字は、大学生に1週間日記をつけてもらい、算出した一日あたりのうその平均回数(村井、2000)です。一日に1〜2回というのは、なかなかの頻度です。もちろん、うそといっても、その程度や目的は多種多様です。すでに持っているものを贈られたときに、「これ、前からほしかったんだ」などと口にすることがあります。あるいは、かなりがんばって仕事の準備をしたにもかかわらず、「あまり準備に時間がかけられませんでした」などと、自分の努力を過小に表現して本当のことを語らないこともあるでしょう。

「うそつきは泥棒のはじまり」と言われ、「うそ＝悪」とさられることがしばしばあります。他方で、「うそも方便」ということわざにみられるように、良い結果を導くのならうそも

## 幼児にうそをつきはむづかしい

幼い子どもにとって、うそをついたり、理解したりするのはむづかしいことです。子どものうそを考える上で、おとなの先入観を脇に置いて、子ども自身が「うそ」をどのようにとらえているのか、発達的に理解することは大切です。

さて、うそはその内容が事実かどうかだけではなく、欺こうとする意図の有無や、事実の真偽に関する認識状態といったことが関わって判断されるものです。そのことを考えるのに条件を整理して行う心理学的研究は有益です。幼児を対象に次のようなお話を聞かせるうその理解に関する研究があります(Wimmer, 1984)。

マキシは、お母さんが買ってきたチョコレートに青い食器棚に入れて、出かける。マキシの不在の間、お母さんがチョコレートにケーキ作りに使い、青い棚ではなく、緑の食器棚にチョコレートを片付けてしまう。その後、マキシは部屋に戻ってくる。

マキシの妹が、チョコレートはどこにあるのかを尋ねてきて、マキシは「青い食器棚にあるよ」と答えた。

マキシはチョコレート移動を知らず、チョコレートは「青い食器棚」にあると思っているので、うそをついたわけではありません。ところが、4〜6歳の幼児は、実際にチョコレートがある「緑の食器棚にある」と言っていないので、

必要なものだという考え方もあります。自分の思いや考えを率直に主張するのが必要な社会的な場面があるのは確かです。ただ、日常場面において正論をぶつけ合うだけでは人の気持ちを動かすことはできませんし、なんだか人間関係がギスギスしたものになりかねません。ほどよく情報の調整をすることを、うそはある種「コミュニケーションの潤滑剤」(菊地、2013)としての役割を果たしているのではないのでしょうか。

私たち人間は、ことばによって他者とかかわり、ことばの力を使って現実を越える想像世界を創りあげていきます。ことばによって現実に反する虚構の世界を語る事が可能になるのです。とするならば、事実ではないうそを語るのは、ことばをもつ私たち人間に固有の能力の現れであり、ことばをもつこととうそは表裏一体だといえるでしょう。

子ども自身がつくうそに関して、たとえば、おとなから箱の中を見てはいけなと言われたにもかかわらず、思わず中身を見てしまった後で、「中を見てないよ」とうそをつくことは3歳頃から見られるようになります。ただ、おとなから「この中にはミニカーが入っているよね」などと引っかけ質問を向けられると、「ちがうよ! 人形が入っているよ」と、本当のことをしゃべってしまうのです。幼児には、自分の違反的行為を隠したり、おとなからの叱責を避けるためにその場限りで事実を否認することはできても、事実とは異なることを意図的かつ持続的に他者に信じさせることはなかなかむづかしいことなのです。

